

## 「ただ神の栄光のために」

皆さん、おはようございます。台風一過、先週からようやく秋の気配を感じられるようになってきました。コロナの感染者数も全国的に減少傾向にあるように見受けられますが、油断することなく、出来得る限りの予防対策を講じながら、下半期の歩みへと導かれたいと思います。今回の台風10号の襲来によって停電や土砂災害に見舞われた地域の人々の上に、今朝も神様からの慰めと励ましが与えられ、元の日常を取り戻すことが出来ますようにお祈りを致します。

先週より第一コリント書の10章に入っていますが、8章においてパウロが取り上げた「偶像に供えられた肉の問題」について、この10章の後半からは2つの具体的なケースを例にあげて勧告の言葉が述べられています。先ず14節以降22節において、パウロは異教の祭儀に参列する際、供え物の肉を食べるケースについて触れています。段落冒頭の14節において、パウロはコリント教会の信徒たちに対して、偶像崇拜はどのようなものであれ、用心深く避けるようにと述べた上で、教会における聖餐式と対比させながら、それが何を意味しているのかについて、教え示そうとしています。教会での聖餐式において、教会に連なる一人一人は、共に主の食卓に着き、パンとぶどう酒を口にすることによって、互いにキリストに連なる一つの体とされていることを確認します。つまり、一つのパンをちぎって共に食べる時、それは私たちが目には見えないキリストの体の恩恵を共に受けることを示しているのではないかとパウロは告げています。また、彼は古代イスラエル民族の祭儀においても、祭司やレビ人は供えられた物を食べることを通して、神との交わりの中に入れられ、それによって一つとされていたことを指摘しています。19節において、さらにパウロは問題の核心部分にせまり、「…偶像に供えられた肉が何か意味を持つということでしょうか。それとも、偶像が何か意味を持つということでしょうか。」との問いを投げかけています。おそらくパウロはすでに8章の前半で指摘しているコリント教会内の一部の人々(世の中に偶像の神など存在しないのであるから、何を口にしても大丈夫と言っている人たち)の事を念頭において、この所で偶像崇拜に対する警鐘を鳴らしているのだと思われます。パウロは彼らに向かって、異教の神々との交わりを意味する祝宴において、偶像に供えられた肉を無感覚で食べるならば、それは悪しき霊のペースに巻き込まれており、「偶像に献げる供え物は、神ではなく悪霊に献げている…」(20節)とまで告げています。つまり、パウロはキリストを主と告白するキリスト者が聖餐式において主との交わりを持つことと、異教の祭儀に列席をし、そこで食事をする事は決して両立すべきものではありませんと、教えているのであります。あえてそれを行う人々がいるならば、その人は主の力を見くびり、荒野でのイスラエルの民がそうであったように、偶像崇拜を通して「主のねたみを引き起こす」(22節)ことになるでしょうと、戒めの言葉を告げています。

23節以降、最後の33節まで、パウロは「偶像に供えられた肉の問題」についての2つ目の具体的な事例について触れています。異教の祭儀において肉を食べるのは対照的に、本段落においては各家庭において肉を食べる場合について述べられています。パウロは段落の冒頭において、9章の後半で語った「弱い人に対しては、弱い人のように…」との原則に立って、「誰でも自分の利益ではなく他人の利益を追い求めなさい。」(24節)と述べた上で、コリントの町の市場で売られていた肉の問題について言及しています。以前にも触れていますが、当時、市場では一度偶像に供えられた肉が出回っているというのが常であったと言われていました。

その事についてパウロは、「すべて市場で売られている物は、いちいち良心に問うことをしないで、食べるがよい。」(25節)と助言しており、なぜなら「地とそれに満ちている物とは、主のものだからである。」(26節)と述べています。旧約の詩編の著者も「地とそこに満ちるもの、世界とそこに住むものは、主のもの。」(詩編24篇1節)と証しているように、人の手でこしらえた偶像が、肉そのものを汚すことはなく、動物を含めた

全ての被造物をお造りになった御方は造り主なる神様である。よって、出所が神様なのであるから、いちいち詮索しないで、何でも感謝して食べなさい、と告げているのであります。その原則は、信仰を持たない人々の家庭に招かれた場合でも同じであり、食卓に出された食べ物は基本的に自由に食べても構わないと言います。ただし、その場合例外もあり、もし出されたものが、「偶像に供えられた肉である」と、招待者もしくは列席者が告げた時には、そのように告げた人の良心のために食べてはいけません、とパウロは告げています。彼はどこまでも良心の弱い人々や、この事で戸惑いを覚える人がいるのならば、その人々のことを最大限配慮して食べるべきではない、と告げています。最後にパウロは、この「偶像に供えられた肉の問題」に関して話を締めくくるあたり、クリスチャン生活全般に通ずる原則を提示し、「食べるにも飲むにも何をするにせよ、神の栄光のためにすべきである」(31節)と告げています。一見、神の国とは直接関係がないとも思える、この世での飲み食いをも含めて、万事が神の栄光を現すためになされなければならないと、パウロは語っているのです。

さて、先月8月18日に映画『炎のランナー』で主演を演じたイギリス人の俳優であったベン・クロスさんが、72歳で他界されたことをインターネットのニュースを通して初めて知りました。日本では今から38年前の1982年に公開された映画という訳ですから、若い世代の方々にとっては、大変古臭い映画との印象を抱かれると思います。けれども、私自身は当時、地元の中学校で体操部に属し、リアルタイムでTVのコマーシャルや映画のテーマ曲を鮮明に記憶しており、改めて映画の内容を思い起こした次第です。当時中学生の私としては、映画の内容よりも、シングルチャートで1位となったシンセサイザーによるテーマ楽曲の方が魅力的で、恥ずかしながら映画の内容について知ったのは、高校生になってからでありました。地元の教会へ通い始めた高校3年生の時に、教会のビデオ上映会で『炎のランナー』が上映され、そこではじめて、あの美しいBGMが流れていた映画が、このような映画だったのかということを知りました。当時、信仰を持って間もなかった高校時代の私にとって、ベン・クロスさんが演じるユダヤ系イギリス人の短距離陸上選手ハロルド・エーブラムスは、オリンピックで優勝するためには手段を選ばない野心家のように見え、そんな彼とは生き方が全く異なる、もう一人のクリスチャンのランナーであるエリック・リデルの方が輝いて見えたものであります。この映画の中で登場する二人は、共に実在した人物であります。映画の中で描かれているように、リデルはスコットランドの宣教師の家庭に生まれた敬虔な信仰の持ち主でありました。天性の才能に恵まれ、誰よりも早く走る天分に富んだ彼の生き方のモットーは、「走る時に神の喜びを感じ、走るのをやめる時、神の御心に背く」との言葉に凝縮されているように思います。1924年に開催されたパリ・オリンピックでは、100m走の日程が主の日である日曜日と重なり、やむなく出場を棄権するものの、急遽、他の日に400m走で出場することになったリデルは、ライバルの米国選手を破って見事に優勝し、金メダルを獲得するのであります。彼はエディンバラ大学を卒業後、父と同様に中国に渡り、後に宣教師となり、満州事変勃発から12年後の1943年に日本軍によって抑留され、山東省の収容所の中で天国に召されたと言われています。2018年に日本でも公開された続編の映画『最後のランナー』では、そのエリック・リデルの宣教師として道を選び取った中国での過酷な様子について描き出されているとの事ではありますが、神により近づくために、43年という人生を駆け抜けていった彼の生き様は、まさに使徒パウロの言う、神の栄光を現すために選び取った道程であったと言えます。

次主日の9月20日(日)には教会創立92周年の記念礼拝が行われますが、私たちの信仰の先達たちが歩まれた信仰の足跡を想起して、このコロナ禍においても主に対する信仰を貫くヒントが得られ、教会の未来を展望する良き機会となりますように、共に祈りたいと思います。「あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい。」(31節)と語った本日のパウロの言葉を、私たちの心に深く留めながら、信仰の高嶺を目指して進みゆこうではありませんか。